

1. 教員および授業の概要

①教員名： 中村 圭 (Nakamura Kei)

②担当科目

博士前期課程：地域開発政策専門講義 8 (ジェンダー論)、地域開発政策研究指導 I～IV

③教員のプロフィール

立命館大学大学院国際関係研究科博士前期課程修了 修士 (国際関係学)

同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程

成城大学大学院社会イノベーション研究科博士後期課程

博士 (社会イノベーション学)、専門社会調査士

④所属学会

日中社会学会、地域社会学会、日本社会学会、関西社会学会、

日本マネジメント学会、経営行動研究学会、社会経済システム学会

⑤研究領域や関心をもっているテーマ

人材の流動性や多様性が高まるなか、どうすれば地域社会や企業経営もふくめてみんなうまく幸せにやっていけるのか？ということをもずっと考え続けています。

ダイバーシティ&インクルージョンマネジメント (特にジェンダー/中国人高度人材)

中国人富裕層の経営投資行動とインバウンド観光、ライフヒストリー

京都祇園祭 伝統文化の維持継承システムと地方への文化の伝播

⑥研究指導方針

学術研究上の意義と社会的意義を兼ね備えた研究テーマになることを目指します。

社会人学生を歓迎します (特に女性の方)。授業時間、オンラインでの受講を考慮します。

修士は2年間しかありません。事前に研究計画をしっかりと練ってから受験されることをお勧めします。

⑦指導可能な研究テーマ (あるいは過去 (現在) に指導した研究テーマ)

ジェンダー・フェミニズム、比較社会学、経営文化論

ダイバーシティ&インクルージョン・マネジメント、など

2. 研究業績リスト

①著書

(1) 単著『なぜ中国企業は人材の流出をプラスに変えられるのか』勁草書房 (2019)

※ 日本マネジメント学会 令和元年度 山城賞 (本賞) 受賞

- (2) 「マンション町衆が担う山鉾町の伝統—京都祇園祭 螭螂山—」 牧野修也編『変貌する祭礼と担いのしくみ』学文社 (2021)
- (3) 「越境するチャイニーズとともに生きる」 西原和久・杉本学編『マイノリティ問題から考える社会学・入門』有斐閣 (2021)
- (4) 「ターミナル・商業地域—北区曾根崎・堂島—」 鯨坂学他編『さまよえる大都市・大阪』東信堂 (2019) ※ 地域社会学会 第13回 地域社会学会賞 共同研究部門 受賞
- (5) 「家族構造から見る現代中国企業組織と流動人材」 瀬地山角編著『ジェンダーとセクシュアリティで見る東アジア』勁草書房 (2017)
- (6) 「京町家の社会学」 鯨坂学・小松秀雄『京都のまちの社会学』世界思想社 (2008) 共著
- ②論文
- (7) 「京都祇園祭 あふれかえる観光客—オーバーツーリズムに対抗する山鉾町と町衆—」 同志社大学経済学部 『経済学論叢』第73巻第4号 (2022)
- (8) 「東アジアにおけるトランスカルチュラルの考察—京都祇園祭における中国の影響と地方への伝播を手がかりとして—」 成城大学社会イノベーション学部『社会イノベーション研究』第17巻第2号 (2022)
- (9) 「現代中国における高度人材の職業流動と企業マネジメントに関する実証的研究—跳槽 (tiaocao) をめぐるミクロ・メゾ・マクロ分析—」 成城大学博士学位論文 (社会イノベーション学) 成城大学 (2018)
- (10) 「「中国企業」VS.「流動人材」—親族構造と「包」の概念から見る現代中国企業組織—」 成城大学経済研究所報告 第78号, 成城大学経済研究所 (2017)
- (11) 「「中国企業」VS.「流動人材」—企業経営にみるチャイニーズネスの考察—」 『日中社会学研究』第22号, 日中社会学会 (2014)
- (12) 「「都心回帰」による大阪市の地域社会構造の変動」 『評論社会科学』第98号, 同志社大学社会学会 (2011) 共著
- (13) 「都心回帰時代の地域住民組織の動向—大阪市の地域振興会を中心に—」 『評論社会科学』第92号, 同志社大学社会学会 (2010) 共著
- (14) 「「跳槽」—グローバル化における中国の人材流動に関する考察—」 『日中社会学研究』第17号, 日中社会学会 (2009) ほか多数

3. 学生に対するメッセージ

私は小さな頃から「なんで？」を連発する面倒臭い子供でした。「女の子は可愛げがなかったらあかん」とジェンダーロールを押し付けられて育ちました。30代の半ばで社会人学生として大学院に進学し、自分の「なんで？」に対して、自分なりの答えをだすことができる研究にハマリ、人生が想像もしていなかった方向へと走りはじめました。「個人的なことは政治的なこと」と言われますが、あなたの疑問はあなただけの問いではないかもしれません。残念ながら今の日本では学位は「足の裏の米粒」と言われるくらい「とっても喰えない」ものでもあります。けれども確実に学問は、あなたの人生を深く面白く、そして強く豊かにしてくれることは間違いありません。